

初 め ぐ り

石川理紀之助著

旅 程

十月十九日	豊川山田	〃	秋田町
十月二十日	秋田町	〃	戸島
十月二十一日	戸島	〃	仙北郡落合村
十月二十二日	落合村	〃	仙北郡生保内駅
十月二十三日	生保内駅	〃	岩手県雫石駅
十月二十四日	雫石滞在		
十月二十五日	雫石駅	〃	盛岡十三日町
十月二十六日	盛岡滞在		
十月二十七日	盛岡	〃	稗貫郡向町
十月二十八日	向町	〃	胆沢郡前沢駅
十月二十九日	前沢駅	〃	宮城県築館駅
十月三十日	築館駅	〃	志田郡鹿島台村
十月三十一日	鹿島台村	〃	宮城郡松島村
十一月一日	松島村	〃	仙台国分町
十一月二日	国分町滞在		
十一月三日	仙台	〃	柴田郡大川原村
十一月四日	大川原村	〃	福島郡伊達郡桑折
十一月五日	桑折村	〃	福島町
十一月六日	福島町	〃	安達郡本宮町

十一月七日 本宮町 〃 安積郡桑野村
 十一月八日 桑野村 〃 岩瀬郡須賀川

初めぐり解説

石川理紀之助は明治十年七月県庁勸業課に出仕、同年十月内国勸業博覧会の用務を帯びて東京出張を命じられる。この旅について理紀之助は『初めぐり』という紀行文を書いたが、草木谷山居の火災で後半部分を焼失した。また、『内国勸業博覧会參觀道の記』という記録文を残している。

初めぐり

明治十年十月十九日出立、内国博覧会参観

岩手、宮城、福島、茨城、東京

火災にて失ひ、のこれをとゞめおきぬ。

石川理紀之助

こたび内国勸業博覧会におほん用のことある序に道すがら四方の県の種つもの作る業を見てかへれとの仰を蒙りて、明治十とせ十月十九日我山田村を出たつ。母は身まかりてよりかぞふれば三十五日なり。独まず父君と妻とはわが旅立のいそぎをする。長男民之助、次男老之助はとく虻川の学校に往ぬ。民之助はとし十一才なり、父東京にまからばとくかへらなんといへて出ぬ。次男老之助はまだ八才なり、学校に出たついでおのれと共に母のおきつきに詣でぬ。程なく友だちのわらはあまた来たれば、わかれをしきかほにて何ともいはで打まじりていでぬ。

独ます親のみ親につかへませ長居はせずに我もとくこん

など心の内につゞけぬ。ことしの小作米をあらため

んとてあまた作人のきたり、かれこれとさだまりをつけてかへしぬ。召使ふおのこ藤田重寛、藤田雅胤、伊藤豊治よりかへり文もてきたり、うからやからむまのはなむけす。父も妻も身にことなくてとくかへらせよとかへすがへす言かはしつゝ門出す。守孝君も秋田に用の事ありてともにまかりぬ。

母のおきつきの前にきたればことし三つになれる幼き女のわらは縫女十ばかりなる女子に負れて何の心もなく我かたにゆびさして笑ふ。しばしふりかへりみておのれ遠き境に至りぬかへりにはよき衣を買ふてもとらせんといひてわかれぬ。

旅立は別ばかりかなしきはなし。それより虻川に至りて鐙両家に立より、事務所につふは山田龍毛村の村総代の会議ありとて数多あつまり、戸長、大島書記、鐙氏などにわかれをつげいでたつ。ありあふ人々門にいでゝはなむけす。大久保村にいたりて弟鎌田氏、高橋君などにわかれ、それより小泉にまゐりぬ。こは父母ともことなくいませば酒などらてゝはなむけす。兄基直もこたび共に登らんとて旅の急までせしをさわる事のありてとゞまりぬれば、父母は兄のとゞまりたるも残りをしくおのれをひとり門出さするもかなしくしばし盃をかはしてわ

かれぬ。鳩崎の姉のもとに立寄今日は秋田町橋本氏にてやどりぬ。

二十日

朝とく清岡君と石田権令公にまかりぬ。色々の仰ごとありて庁にいで、岩手、宮城、福島県庁にもてまゐまうれよとて文を給はりぬ。同課の人々にわかれを告たゞちに中村直三、石川岩之丞に逢まほしく車にのりて矢橋に至り色々物語してかへれば、佐藤信学、中島守孝むまの鼻向とてふりはへきたりぬ。橋本兄弟には盃のいそぎなどとのひてまちつけたり。酒を汲て

信学

かへる日を君がみてこんまつしまの千世へん斗り久しとおもはん

守孝

思ひきや君と都にいでずして心をそへてやらんものとは

おのれも

種つものつくる学の旅立にうべ稲刈の月ぞたのしき
などいひてみなみなねもごろにわかれをしみ橋

本父子と中島氏は牛島まで送りきぬ。けふは空はれて天気もよし、牛島より車にのりて三ッ屋、一ッ屋、二井田、横山に至りこれより馬にのり御所野、豊成を過て戸島の駅岡部正蔵にやどりぬ。この里近きは稲揚もなかなり。濁川の舟木某と同宿しぬ。

二十一日

雨ふる。戸島をいで、和田を過ぎ石川の渡を舟にてこえ、宮崎より馬にのり神ん内、舟沢、合貝を過ぎ境駅（羽後国仙北郡に入る）より東に入る山道ありこれを繋ぎ街道といふ、角館に行近道なり。これより馬にのりて十二の川を越えぬ。雨はしきりにふり馬夫はとくかへし給へおくれではかへさ水かさまさりて川こえがたからんとねがふ。此川をこえてかへしぬ。

みるが内に木のはながれて谷川の水かさやまされり秋の夕雨

それより落合村にいたりやどりをもとむれど山里なればいとなむやどもなく、しきりにこひて佐川蔵吉といふ農家にやどりぬ。薪をたきぬれたる衣を乾す。やゝありていといとふるびたる膳に垢の付て黒くなりたる箸をそへて出しぬ、飯は黒く汁は毛を切

らぬ山芋に大根の干葉なり。げに椎の葉にもりたる方はこれよりまさりぬべくおもはる。寝なんとすれば藁柄のふとんにて下はあたゝかなれど衾はかの垢付にてうしともつらしともいふべきものは。夜もすがら雨ふる。

二十二日

こゝより馬にて水沢、こづみ、熊堂、山刀泊りを過ぎ

木のみはむ鳥ならずしてかく斗りふかき紅葉の色やみるべき

又山の紅葉を見て

山川の底に紅葉のかげろひて水にも秋の色はみえけり

露ふかき秋の山辺に分入て夕日に匂ふ紅葉をぞみる

雲然を過ぎて舟渡あり。角館より（秋田の一門佐竹某の旧館）馬をのりかへ城回、荒川尻、卒田を過ぎ刺巻の舟渡りをこえて生保内駅古村重右エ門にやどりぬ。この里は稲刈半ば過たり。第一号の通信文送りぬ。

二十三日

生保内より馬にて国見峠をこえ行、山の半よりたえだえ雲晴れてけしきことよろし。こは明治八年新道を開きて今は仙巖峠といふ秋田、岩手の県境なり。

国見山今日越くれば昨日まで雲と見えしは高根也けり

つづら折のぼる国見の山おろす衣手寒し峰の篠原峰に至れば岩手県の標杭とて奥山潟の側に秋田県迄二十六里三丁五十四間、岩手県まで九里二丁二十六間とあり。橋場（陸中国岩手郡）といふ処よりかちにて上野を過ぎ雫石駅上野市右衛門にやどりぬ。耕耘のわざも国の手振もことなれば明て

二十四日

もこゝにとゞまりて色々の事を調べぬ。今日は此里雨ふる、ゆふべ岩手山ふもとまで初雪ふれり。

ふもと田の稲刈月にみちのくの岩手の山は雪ふりにけり

二十五日

空はれ、歩にて大釜、上厨川、下厨川、二王など

いふ処を過て森岡（旧南部信濃守旧城）十三日町阿部七太郎にやどりて、岩手県庁（令島惟晴）にいでぬ。我秋田県より奉職したる石井新蔵いできたり案内出て第二課にまゐり草木栽培、牛馬飼場、機業場其他の試験場を案内の官員いでゝ見回りぬ。これより二号の通信文を加藤千波先生と平川君とに送りやりぬ。

二十六日

勸業場にふたゝびまかりてものゝ形などうつしとりぬ。春錦社に詠草を送りぬ。昼より青物町松島元吉といふ老農をとぶらふ、此人いとくだくだしき事のみにへて更に用のある事をいはず、されどしばらく農談してついで森岡の歌人二見清六をとぶらひけれど某が社にまうでたりとてむなくかへりぬ。

二十七日

時雨ふる。とく庁にいでゝ二課にも暇乞をして森岡を出立。仙北町なる二見のもとに出んとして明治橋（大橋なり）をわたるほど車にのりたる翁に逢へり、いかさまこは二見ならじやとおもひけれどさしてしらざれば過ぬ。かの二見の宿に立よればしばし

あとに車にのりて他にまかりぬといふ、先に見し翁ぞ二見なりける。

言の葉はかはさざれども玉くしげ二見の君を一見みしかな

津志田を過ぎ上野より車にのり見る前（陸中国紫波郡）、高田、二日市を過ぎ郡山にて車をかへ、こゝに紫波の御所の旧跡あり。北日詰、南日詰、かけ沼、猪淵、石鳥谷（陸中国稗貫郡）、八まん、黒沼、かりや原、宮の目、花巻を過ぎ向町市川理蔵にやどりぬ。この里は稲刈半過たり、森岡城代のあとあり。

二十八日

空はれ。十二条、成田（同国和賀郡）、二子、黒沢尻和賀橋（八十六間）をわたり、爰はもと南部と仙台の境なり。相去、三ヶ尻、和賀（同国胆沢郡）、金ヶ崎舟渡をこえ八幡、水沢（伊達将監の古館）、須江、堤尻、中野、折居、中畑、関を過ぎ前沢駅（三沢信濃古館）太田信次郎にやどりぬ。第三号の通信文送りぬ。此里は稲刈半過たり。

賤のをが粟穂刈千山畑の麦の若葉に秋風ぞ吹

二十九日

天氣よし。朝とく出んとすれば鳥鳴。

旅衣曉かけて行空の山本遠く鳥鳴なり

車にのりて瀬原（名物の金命丸）を過ぎ衣川にいたり、此川水流れて北上川にいろいとゆたやかなる流なり。東に秀衡の籠城せし山あり、南にほうか館といふむかし高館の跡あり、西衣川の水上に三峰山、月山などいふさゝやかなる山あり松紅葉しげれり。春は東の秀衡籠城せし山に桜のさきてけしきことよろしき地なるよし。此山と高館の田の間に衣川の落合北上川あり、こは南部明治橋の川下にて石巻より松嶋に出る川なり。

衣川底にうつろふ紅は三峰山の紅葉也けり

衣川をこえて衣の関村といふを過ぎ平泉の内高館にて義経の旧跡に木像あるよしなれど車いそぎて見ず。平泉の西千葉某の方にて秀衡の三代の位拝あり、秀衡の木像同じく床かざりなどを見するなり。平泉（同国岩井）、樋口、山の目、かし町、一の関（田村左京大夫旧城）、鬼しかべを過ぎ県境あり。岩手境より二十五里二十二丁十間、宮城県まで二十二里二丁十二間三尺、是より陸前国なり。有壁（陸前栗原）より西にあたり駒ヶ嶽見ゆ。金成、沢辺、城生の、下宮のを過ぎて筑館駅本間尚吉にやどりぬ。

この里稻刈半過たり、麦蒔も中なり。

三十日

空はれ。歩にて高清水より南枉島街道に入る。萱刈村、小松村（同国遠田）を過ぎ田尻の市中より涌谷に行追分あり。舟渡をこえて中坪、春生を過ぎ又舟渡あり。松山（同国志田）に至れば女のいでゝしきりにやどり給へといふに、おくをみれば座布二つ三つありて間に橋などかけたり、こは青楼ならんと袖ふりはらひて山道を急ぎ鹿島台村宮沢助右エ門にやどりけふは松島までとおもひ立たれど、この先なる品井沼は二十一日の雨にて水かさまさりて舟にてわたるよし。日も西山にかたぶけば此山里にやどりぬ。翁おふな唯ふたりなり、種々の物語してもてなす。これは少し落合のやどりよりよろしきかなれど、小豆の粮などにておもひやられたるものなり。されどこのふたりの志直くして捨がたく、我もたるふるき皮箱をとらすればふたりは宝ものをえたりとて玉くしげ、いくたびもあけてはみとどてはみ悦ぶことかぎりなし。

道もなきおどろがおくの柴の戸をたゞくは夜半の木のは也けり

三十一日

天気よし。あるじの翁松ヶ崎までおくりきぬ。この頃あしき病のはやればもてまゐらせよと赤きとうがらしなどもめきたり、この松ヶ崎より品井沼を船にて渡り安沼（同国宮城）村にあがりて十文字といふ処より東の山道に入て富山観音に詣て松嶋を眺望す。下りて手樽村より石巻街道に出て十文字、追分、あてら坂より高城を過ぎ松島扇屋弥左衛門にやどり三階の高殿にのぼりて島々を眺望す。

詠めすてゝえこそねられね松島やをじまが磯に澄る月かげ

立こむる浦わの霧は吹はれてあらしに澄る松しまの月

松島の浪にうかべるかげみれば月のみ船もこぐかとぞおもふ

かもめなくをじまはるかに引汐の空にかたぶく有明の月

十一月一日

小雨ふる。春日村より車にのりて塩釜明神にまうでゝ古釜などを見て野山道をこえ、野間の田道を行て野田の玉川に出る。野山の崎に松五六本たてる処

に能因法師の石碑あり、前に幅三四尺ばかりの流れあり玉川これなり。西に川上ありて水は玉となりて流るゝと車夫かたる。

小山田の刈稻をはこぶますらをが棚はしわたす野田の玉川

此川ぞへを行てしばしありて留谷村に至り楓山といふあり、こゝに二本の古楓あり。この東一丁ばかり田の中道に思惑橋あり、これを又阿部のまつ橋ともいふ。橋の南側に楓二本ありかたはらに古来より西行の石碑埋れたりと言伝ありて、行幸のとき堀たりしに石はいでたれど彫たる文字にあらねばそのまゝ捨てたりとて石はありき。これより八幡村にいたり村中に大船繫の石とて二ツ三ツあり、こは昔此地海岸にて船を繫たる石なりといふ。村中西にあたりて興の井といふ池あり、中に興の石、都島といふあり、こは沖の石とよめる処なるよし。此石をもて硯をつくれば水の乾くことなしといふ。

又北にあたりて小さき森あり人家のうしろにて松一と本たてり、これを末の松山といふ。この里より三十丁余を去りて浮島村といふ処に太神の宮といふ田の中に一の祠あり、川原左大臣の墓なりと里人言伝へり。これより二町余を過ぎ市川村に壺の石

碑あり、瓦葺の堂に入て多賀城のふもととなり、これより塩がま道にいで今市にいたる。今市は松島と塩がまの追分なり。車をかへて安内、原の町を過ぎ仙台（伊達陸奥守の旧城）国分町菊地平三郎にやどりぬ。この町は青楼入まじりて終夜つゞみのおとかしまなくよをあかしたり。

二日

宮城県の二課にいで、七属須子為明にあふ。同氏案内して栽培試験地、機業、牛馬飼場を廻り士族就産の会議を傍聴す。佐伯真満に逢ふ。アラビヤ馬（五尺六寸）の牡牝、また洋牛などいとたけきものあまたあり。こは松平陸奥守の旧城にて今は鎮台となり、又上等裁判所、出納局出張所、師範学校其外病院、公園地等種々ありていとにぎはしき県なりき。こゝより第四号の通信を送りぬ。日くれて佐伯氏をとぶらふ、此県の活板社長長須田平右衛門に逢ふ。

三日

朝小雨ふる。仙台を車にていでたつ。しばし行て広瀬川といふあり、名にしあふ広き川なりき（橋長六十間余）。こを境にして南を名取郡といふ、それ

より長町駅を過ぎ大野田に至り歩にて大野田村森常蔵をとぶらふ。こも又いとながき橋二処あり、中田、増田の駅を過ぐる頃雲はれ、今日は天長節なれば家毎に国旗を立ならべ駅いとにぎにぎし。飯の坂、植松、本郷を行て岩沼より車にのる。此里に竹駒の水神の社あり、この駅は名取柴田の郡境なり。阿武隈川の辺を行て西に金峰山あり。此山は雪真白にふり吹おろす嵐面寒く東に南に川おと高く、猶車をいそがせて槻木、舟迫を過ぎ大川原に至り高山庄吉にやどりぬ。

四日

天気よし。歩にて金ヶ瀬を過ぎ朝風いと寒し。落ばかく。柴田、刈田の郡堺あり、これより岩城国なり。宮駅より車にのりて子捨川の小橋をわたり白石川（六丁四間）を過ぎ白石、五賀、齋川、越河をかちにていそぎ、こゝに県境の標木あり、宮城県より十六里十八丁十七間四尺、福島県より五里十七丁十五間三尺、則ち岩代国伊達郡に入る。原町、藤田、一本木、岡山、八幡を過て桑折丸谷庄助にやどりぬ。こゝにて陸前、岩城、岩代の絵図をひらきてはじめて県境の辺りに下紐の関のある事を知りて、そのほ

どを尋ねしに知る人なし。

五日

空くもり、とく起て桑折を出たつ。歩にて川原町、長岡を過ぎ摺上川橋をわたる。こゝは伊達信夫の郡境也。それより瀬の上、かなた、本内、松川を過ぎ五十辺に至れば、信夫もて摺石にいるしるしの石碑あれどもむかし里人これをとぶらふ人のしげきが為畑作のそこなふことをいとひて埋めたりとてなしといへり、まからで過ぎぬ。一里塚、荒谷、五日内などを過ぎ福島町十二丁目田中儀兵衛に着きて福島県庁に出れば岡田寧邦案内して二課に行きいろいろ用のことすみてやどりにかへり第五号の通信を中村氏と秋田県第二課に諸県の景況をしたゝめ遣しぬ。こゝに立花家士族菅野八司郎といへる人同宿して桑園のことなど承りぬ。

六日

空はれて天気よし。とく信夫橋をわたり歩にて江の目、とやの、伯老太平寺伏拝、清水町、浅川を過ぎ松川に至る、こゝは信夫と安達の境なり。これより吉倉、二本柳、油井町、二本松（旧丹波家城あり）

に至り製糸会社にいたればこゝは旧城内にていと高き石垣の上にて、西洋器械蒸気もて製糸をなせり。社長山田修は他にいでゝなし、こゝより高越、北杉田、南杉田、馬川を過ぎ本宮町角屋鹿之助にやどりぬ。この夜白川郡田島村尾股喜十郎より蒟蒻の作りかたなど承りぬ。

七日

朝小雨ふる、ほどなくはれたり。歩にて仁井田を過ぎ五百川、こゝは安達と安積郡の境也。これより馬にのりて高倉、安積、日和田（こゝにあさかの桜とて一本村の東にたてり）、八ッ山田、福原、久保田、大十、郡山の入口より西に入て開成山の開墾場へ入り、六等属石井貞蘆に逢う。この開墾は明治六年の起業せし地にしてことごと物ことにとゝのひ、田畑六萬町歩、戸口貳百戸ほどあり、村名を桑野といふ。此村にて太田勇吉といへる方にてやどりぬ。

八日

とく西洋器械フラヲにて原野を転り、かつ色々のことなどいといとねもごろに教をうけて、午後より此里を立出て郡山より車にて小原田、日出山、笹川

(こゝは安積岩瀬郡境なり)、十べ目、滑川、下宿、
中宿を過て須賀川にやどる。